

俳句・俳人物語

池田 彌三郎



古典文学全集〈25〉

俳句・俳人物語

池田彌三郎



池田 彌三郎
俳句・俳人物語

ポプラ社 昭和47 (1972)

244 p 23cm (古典文学全集 25)

〔分類〕 918

著者略歴

1914年、東京に生まれ慶応義塾大学文学部を卒業後、現在、同学文学部教授。文学博士。NHK用語委員、国語審議会委員などを兼ねる。

著書には「日本芸能伝承論」「日本の幽霊」「光源氏の一生」「芸文散歩」等多数がある。

古典文学全集 25

(著者との話し合いにより校印廃止)

俳句・俳人物語

480円

著者・池田彌三郎
いけだ やさひろ

発行・昭和47年8月30日

©

発行者・久保田忠夫

発行所・株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 振替東京149271番

活版印刷・新興印刷製本株式会社

オフセット印刷・有限会社 トライ印刷所

口絵原色印刷・株式会社 双美堂

製本所・石井製本工場

クロス・東洋クロス株式会社

本文紙・北越製紙特漉上質

は し が き

みなさんの中には、俳句を作っている人、あるいは作ったことのある人が、きっといるだろうと思います。また、新聞や雑誌などの、俳句欄というところで、多くの人々の俳句がならんでいるのを読んだ人もいるだろうと思います。

この俳句という文芸を、だいたい、歴史的な流れにそって、江戸時代にはいるす

こし前のところから、明治にはいつてから出た正岡子規までを、眺めわたしたのがこの本です。

はじめに俳句を一句かかげ、つぎに訳して、三行の詩のような形にしてみました。それから句の解釈、つぎにその句の作者について書きました。そしてもうひとつ、一句の俳句の解説の中に、俳句という文芸について、当然知っておくべき知識をあげておきました。だいたい、こういう筆のすすめ方で、一句についての解説が二ページにおさまるようにくふうしてみたのもこの本の特色です。それは、この本は、通読してもらって、まとまった印象を得てもらいたいと思いますが、同時に、俳句というみじかい文学ですから、どこから読みだしてもいいし、そのために、開いたところにはかならず俳句がひとつあって、そこだけでまとまった読みものになっているというように考えたからです。

なおこの本は、私とみなさんとの、ちょうど中間の年齢の、私の友人、井口樹生さんに手伝ってもらいました。わかりやすく、みなさんとのあいだの橋渡しをしてもらいたかったからです。



《目次》

元朝 がんちょう の見るものにせん。富士 ふじ の山……………	宗鑑 そうかん …二〇
雪 ゆき ながら、山 かみ もと霞 かす む夕 ゆふ べかな……………	宗祇 そうぎ …三
風寒 ふうかん し。破 やぶ れ障子 しょうじ の神無月 かみなづき ……………	宗鑑 そうかん …四
元日 がんじつ や。神代 かみよ のことも思 おも はるる……………	守武 もりむね …六
皆人 みなびと の、ひる寝 ね のたねや。秋 あき の月……………	貞徳 ていとく …六
しほるるは、何かあんずの花 はな の色……………	貞徳 ていとく …二〇
むさしの雪 ゆき ころばしか。富士 ふじ の山……………	徳元 とくげん …三
月影 つきかげ をくみこぼしけり。手水鉢 ちゆうすいばち ……………	立圃 たちほ …四
順礼 じゆんらい の棒 ぼう ばかり行く。夏野 なつの かな……………	重頼 ちゆうより …六
馬合羽 うまがつば 。雪打 ゆきうち はらふ。袖 そで もなし……………	令徳 りやうとく …六
これは、これは、とばかり。花 はな の吉野山 よしのやま ……………	貞室 ていしつ …三
一僕 ひとく と、ぼくぼく歩く。花見 はなみ かな……………	季吟 きぎん …三
雪の朝。二の字二の字の下駄 げだ のあと……………	田捨女 でんすてじよ …四



されば	ここに談林 だんりん の木あり。梅の花……………	宗因……………
浮き世の月、見過 みす ごしにけり。末二年……………	西鶴……………	元
名月 めいげつ よ。今宵 こよい 生まるる子もあらん……………	信徳……………	四
お奉行 おぎょう の名さへ覚え おぼ えず。年暮 としく れぬ……………	来山……………	四
こがらしの果てはありけり。海の音……………	言水……………	四
夕暮 ゆうぐ れのものうき雲や。いかのぼり……………	才磨……………	四
行水 ぎょうすい の捨てどころなき 虫の声……………	鬼貫……………	四
目には青葉 あおば 。山ほととぎす。初 はつ がつを……………	素堂……………	四
古池 ふるいけ や。蛙飛 かわずし びこむ 水の音……………	芭蕉……………	三
病 や む雁 かり の夜寒 よさむ に落ちて、旅寝 たびね かな……………	芭蕉……………	三
荒海 あらみ や。佐渡 さど によこたふ 天 あま の河……………	芭蕉……………	三
山路 やまじ きて、何 なに やらゆかし。すみれ草……………	芭蕉……………	三
梅 うめ が香 か に、のっと目の出る 山路 やまじ かな……………	芭蕉……………	三
夏の月。蚊 か をきずにして、五百両……………	其角……………	四
鐘 かね ひとつ 売れぬ日はなし。江戸 えど の春……………	其角……………	四



桐 きり の葉 は に、光 ひかり り広 ひろ げる	蜜 はち かな	土 と 芳 ほう	六
長松 ちやうまつ が	親 おや の名 な でくる	御慶 ぎよけい かな	野坡 やば
六	六	六	六
しかられて、次 つぎ の間 ま へ出 で る。	寒 さ さかな	支考 しこう	六
市中 いちぢう は、物 もの のほ お ひや。	夏 なつ の月 つき	凡兆 ぼんせう	六
池 いけ の星 ほし 。	またはらはらと、時雨 しぐれ かな	北枝 ほくし	六
別 わか るるや。	柿 かき くひながら、坂 さか の上 うへ	惟然 いぜん	六
芭蕉葉 ばしやうは は	何 なん となれとや。	秋 あき の風 ふう	路通 ろつう
六	六	六	六
松島 まつしま や。	鶴 つる に身 み をかれ。	ほととぎす	曾良 そうら
六	六	六	六
あんどんのすすけぞ	寒 さ き。	雪 ゆき のくれ	越人 あきと
六	六	六	六
こがらしに、二日 ふつか の月 つき の吹 ふ きちるか	六	荷兮 かけい	六
うの花 はな に、はつとまばゆき	寝 ね おきかな	杉風 さんぷう	六
大原 おほはら や。	蝶 ちょう の出 で て舞 ま ふ	おぼろ月 つき	文草 ぶんそう
六	六	六	六
岩 いわ はなや。	ここにもひとり	月 つき の客 きやく	去来 きらい
六	六	六	六
梅一輪 うめいりん 。	一輪 いりん ほどの	暖 ぬる かさ	風雪 ふうせつ
六	六	六	六
元日 がんじつ や。	はれて、雀 すずめ のもの	がたり	風雪 ふうせつ
六	六	六	六



白桃や。しづくも落ちず、水の色……………桃隣…六
 十団子も、小粒になりぬ。秋の風……………許六…一〇
 水仙や。藪のついたる 売り屋敷……………浪化…一三
 それも底、これもおうなり。老ひの春……………涼菟…一四
 待つ春や。氷にまじるちりあくた……………智月…一六
 負うた子に、髪なぶらるる 暑さかな……………園女…一八
 折って後、貰ふ声あり。垣の梅……………沾徳…二〇
 山をぬく 力もをれて、松の雪……………子葉…二三
 若鮎や。うつつ心に 石の肌……………祇空…二四
 井戸ばたの 桜あふなし。酒の酔……………秋色…二六
 初雪や。芦葉のうへの まなこ玉……………沾洲…二八
 入る月のさはるか。動く むら薄……………不角…三〇
 うき草や。今朝はあちらの岸に 咲く……………乙由…三三
 鶯の いくつも捨てて、初音かな……………鷹元坊…三四
 若竹や。筑波に雲のかかる時……………巴人…三六



五月雨を	誘ふや。	軒のあやめ草	柳居
行く年や。	同じこととして、	水車	希因
昼顔や。	どちらの露も間に合はず	也有	三
朝顔に、	釣瓶とられて、もらひ水	千代女	三
ふりむけば、	灯とぼす関や。	夕霞	太祇
初恋や。	燈籠によする	顔と顔	太祇
鳥羽殿へ、	五六騎いそぐ。	野分かな	燕村
お手討ちの	夫婦なりしを。	衣更へ	燕村
ゆく春や。	おもたき琵琶の抱きどころ	燕村	四
むっとして、	もどれば、庭に柳かな	寥太	四
涼しきや。	ともへながるる	山の数	涼袋
暗がりの	鱗に、余寒の光かな	嘯山	三
よわよわと、	日の行きとどく。	枯れ野かな	麦水
雨乞ひや。	火影にうごく	雲の峰	蘭更
清暑し。	石に怒れるひびき	あり	暁台



立 ^た 白 ^{うす} の	ぐるりは暗 ^{くら} し。	夕時雨 ^{ゆうしやれ} ……………	樗 ^き 良 ^ら ……………
怪談 ^{かいだん} の後 ^{うし} ろ	更 ^ふ けゆく。	夜寒 ^{よさむ} かな……………	召 ^も 波 ^は ……………
われにあまる罪 ^{つみ} や。	妻 ^{さい} 子 ^し を蚊 ^か の喰 ^{くら} ふ……………	大魯 ^{たいろ} ……………	二六
さくらさくら。	散 ^ち つて、佳 ^か 人 ^{じん} の夢 ^む に入 ^い る……………	無腸 ^{むちやう} ……………	二六
やはらかに、	人 ^{ひと} 分 ^わ けゆくや。	勝 ^か ち角 ^{かく} 力 ^{りき} ……………	几童 ^{きどう} ……………
水落 ^{みづお} ちて、	田 ^た の面 ^も をはしる	鼠 ^{ねずみ} かな……………	蝶 ^{てふ} 夢 ^む ……………
夕潮 ^{ゆうしほ} や。	柳 ^{やなぎ} がくれに、	魚 ^{うお} わかつ……………	白雄 ^{しろお} ……………
秋風 ^{あきふう} に、	白蝶 ^{はくちょう} 果 ^は てを狂 ^{くる} ひけり……………	青蘿 ^{せいら} ……………	二四
青草 ^{せいそう} や。	人里 ^{ひとさと} ちかき	冬 ^{ふゆ} ばたけ……………	五明 ^{ごめい} ……………
長閑 ^{のどか} さや。	簀 ^す にはぢかるる	海苔 ^{のり} の音 ^{おと} ……………	大江丸 ^{おほえまる} ……………
出 ^い づる日 ^ひ の外 ^{ほか} に	ものなし。	霧 ^{きり} の海……………	士朗 ^{しろう} ……………
魚食 ^{うおく} ふて、	口 ^{くち} なまぐさし。	昼 ^{ひる} の雪……………	成美 ^{せいび} ……………
江 ^え に添 ^そ うて、	家々 ^{けけ} に結 ^ゆ ふ	ちまきかな……………	巢 ^{そう} 兆 ^{ちょう} ……………
節季 ^{せいき} 候 ^{こう} よ。	おれが衾 ^{ふすま} は	どうはやす……………	道彦 ^{みちひこ} ……………
埋火 ^{うすちひ} の	去 ^こ 年 ^{ねん} と成 ^な りけり。	それながら……………	月居 ^{げつき} ……………
			一八



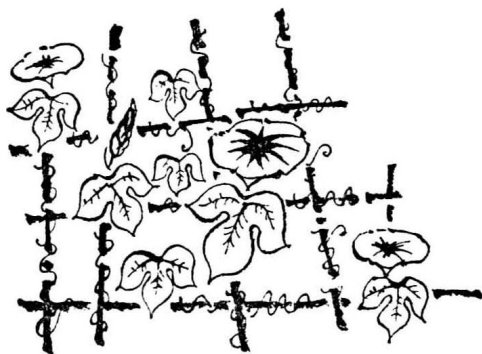
水はやし。りんどう(とう)なんど	流れくる……………乙二…一七〇
つゆの世は、つゆの世ながら	さりながら……………一茶…一七三
これがまあ	終(つひ)のすみかか。雪五尺……………一茶…一七四
菜(な)のにえる湯(ゆ)の涌(わ)き口(ぐち)や。	春の雨……………一茶…一七六
いつ暮(く)れて、水田(みずた)のうへ	の春の月……………蒼虬(そうこう)…一七九
夕(ゆふ)ぐれになる空	澄(す)むや。梨(なし)の花……………鳳朗(ほうろう)…一八〇
つばき落ち、鶏鳴(とりに)き、椿(つばき)また落ちる	……………梅室(ばいしつ)…一八三
椎(い)の実(み)を	ひろひに來(く)るや。隣(となり)の子……………子規(しき)…一八四
三千(さんぜん)の俳句(はいく)を聞(き)し、柿(かき)二つ	……………子規(しき)…一八六
五月雨(さみだれ)や。上野(うの)の山(やま)も	見(み)あきたり……………子規(しき)…一八八
解(かい)説(せつ)	……………三〇
さくいん……………	卷末……………

装てい 新井五郎
カット 難波淳郎



俳句・俳人物語

池田彌三郎



元朝^{がんぢやう}の見るものにせん。富士^{ふじ}の山

宗鑑^{そうかん}

すがすがしい元日^{がんじつ}の朝。

ふと見ると、まさに、

富士山がくつきりと見えている。

晴れてさえいれば、一年じゅういつでも見える富士山^{ふじさん}を、とくに元日^{がんじつ}の朝の景物^{けいぶつ}として見たいものだといいうい方をしたところが俳諧^{はいかい}であつて、歌ではない点^{てん}です。また歌ならば、元朝^{がんぢやう}という語^ごは使わないのです。ふだんの日でない特別な日を、へ晴れの日^はといいますが、昔の元日は、日本じゅうの人々がみないちどにひとつずつ年を取る日でしたから、一夜^やあけて元日になると、まるで世の中がすっかり新しく生まれかわったような気がしました。そういう日に、あのりっぱな堂々^{どうどう}としている富士山を、見るものの第一にしようという、元朝と富士との取り合わせをねらった句^くです。あるいは、このへ見る^はは初夢^{はつゆめ}として見よう、ということかもしれません。

この句^くの作者である山崎宗鑑^{やまざきそうかん}は、俳諧^{はいかい}の連歌^{れんが}をはじめて書きとめた『犬筑波集^{いぬづはじゆう}』の編者^{へんじや}として名高い人であり、俳句を作る人たちによって、俳諧の文学の元祖^{がんそ}だとして尊敬^{そんけい}されました。じつはこの句^くは、はつきりと宗鑑^{そうかん}の句かどうかかわからないのですが、いかにも最初の俳人^{はいじん}の句らしい、新年と富士山とを読みこんだすがすがしい句なので、宗鑑の作だといひ伝え、尊重^{そんちょう}してきたのです。へ俳諧^{はいかい}の連歌^{れんが}



歌^がといふのは、おかし味^みのあるこっけいな連歌^{れんが}というほどの意味です。もともとへ連歌^{れんが}といふものは、歌を作る人たちの文学的な遊戯^{ゆうぎ}としてこのまれて、さかんにおこなわれるようになったものです。

日本の歌の中心は、早くから、五七五七七という形の、短歌^{たんか}となっていました。連歌はこの五七五七七の歌の前半^{ぜんはん}、短歌では上の句^くといいますが、その五七五をAならAが作ると、それにつづけてBが後半^{こうはん}の、いわゆる下の句^{しも}の七七をつける。するとつぎにその七七の句に對して、Cが五七五をつけるといふふうに、たがいちがいに鎖^{くさり}のようにつらねつづけていく、いわば集団^{しゅうだん}で作る文学です。日本では、短歌は早くから文学として正式^{せいしき}な取りあつかいをうけ、歌の世界には、天皇の命令^{めいれい}で集められる勅撰^{ちくせん}和歌集^{わかしゅう}がありました。したがって、歌の良し悪し^{よしあし}に對する学問的な基準^{きじゆん}がだんだんにかたまり、歌を對象^{たいしょう}にする学問、歌学^{かがく}が成立^{せいりつ}するようになりました。そういう、学問を背景^{はいけい}にした正式^{せいしき}な文学でしたから、だれにでも作れるというものではなくなってきました。歌人^{かじん}といわれるほどの人は、それだけで身分^{みぶん}の高い、教養^{きやうよう}のゆたかな人であり、歌はたいへん肩^{かた}の張る窮屈^{きゆうくつ}な文学になっていたのです。こうして、歌が窒息^{ちっそく}しそうな状態^{じょうたい}になったときに、歌人^{かじん}のあいだで、歌作^{かさく}のあとで数人で自分たちの教養^{きやうよう}をのびのびだせる遊戯^{ゆうぎ}として、しぜんにもはやされるようになったのが連歌^{れんが}でした。武家時代^{けじだい}になると、連歌は、公家^{くげ}のように文化^{ぶんか}の伝統^{でんとう}をもっていない武士^{ぶし}たちのあいだで、歌にはいるための練習^{れんしゅう}として、たいへん流行^{りやうこう}しました。時代として最盛期^{さいせいき}は室町時代^{むろまち}であり、その頂点^{ちやうてん}に立つ人は、『新撰筑波集^{しんせんつくはしゅう}』を編集^{へんしゅう}した飯尾宗祇^{いひおそうぎ}（二四二—一五〇二年）です。

雪ながら、山もと霞む夕べかな

宗祇

山々は、雪にかがやき、

山ずそは、霞にけむる。

早春の夕陽。



これはもともと俳句として作られたものではありません。前の句の説明で、宗祇ができましたので、ここにその宗祇の句をだしました。宗祇・肖柏・宗長が三人で作った百韻で文学的価値の高い『水無瀬三吟』の発句です。ひとりで連歌を作ること独吟、ふたりでは両吟、三人のを三吟といいます。また、百句で連歌を完成するものを百韻といい、その百韻を十巻作ることを千句といいます。ところで、宗祇は、『初学集』という連歌の書物で、発句には季が必要であると定めています。この句では『霞む』が春の季題です。また山には雪がある。その冬景色のままながら、すでに暦は春になったので、あらそえないもので、山のふもとのほうは、ぼうつと霞がかかっている。そういう夕方です。この発句に対して、肖柏が、『行く水遠く、梅句ふ里』と脇句をつけました。発句で時を春の夕方と定めたのに対して、その山のふもとのようすを、こまかくいつて、ゆたかな春の水が、梅の香のただよう閑寂な里を遠くへと流れてゆくとなりました。

それにつづく第三番目の句は宗長の、『河風に、ひとむら 柳春見えて』。意味は、川の流れにそつ

ている一群の柳がゆらめいている。そのなやかな動きに春が見えているというのです。

こうして百句つづくのですが、この例でみても、連歌は歌に造詣の深い人たちが、歌語をそのまま使い、その人たちだけにわかる文学観によって吟じていることがわかりましょう。さらに、このころになると、連歌にはぜひ守らねばならぬ連歌の法式ができてきて、連歌もまた上品な難解なものになりました。そうした連歌に対して、機知とこっけいを主とする俳諧の連歌が勢力をもってきたのです。その中心にいた人物がさきにあげた宗鑑です。俳諧の連歌は、連歌の席で百韻を十巻作るうちに、いちばん終わりに、余興として一卷作ることにしたものですから、とくに紙に書きのこすこともせず、いわゆる「言捨て」でした。ですから宗鑑の『犬筑波集』などがのこったのは、めずらしいことなのです。さて、有名な連歌の撰集に、筑波という地名がはいっているのは理由のあることです。『古事記』や『日本紀』によりますと、景行天皇の御代に日本武尊が蝦夷を平定しにおいてになったとき、甲斐（山梨県）の酒折の宮に行きつかれて、へにひばり筑波を過ぎて、幾夜か寝つる——筑波（茨城県）を過ぎて何日を経たのだろうか——と問われたところ、かがり火の番をしていた老人がへかがなべて、夜には九夜。日には十日を——過ぎさつた日をならべかぞえると、九泊十日になります——と答えましたという故事があって、これが、日本で最初の連歌であるというので、連歌のことを「筑波の道」といい、また連歌・書物の題にもそれが選ばれたのです。犬はいやしいという意味で、俳諧を意識した語です。

風寒し。破れ障子の神無月

宗鑑

障子の破れを吹きぬける風。

さむざむとさしこんでくる月。

十月だ。ああ、いよいよ冬だ。

これは宗鑑の俳諧の発句です。連歌の用語で、最初の句を発句といい、二番めの句を脇句、三番めを第三、最後の句を挙句、それ以外の句を平句といいます。俳諧の連歌でもこの用語を受けついでいます。その俳諧の発句だけがだんだん独立性をもつようになり、それをのちの語で俳句というのです。山崎宗鑑（生年不明？—没年一五三九年か四〇年？）の伝記はあまりたしかにはわからないのですが、近江（滋賀県）の人で、本名は支那弥三郎範重といい、足利幕府の將軍義尚に仕えていました。義尚死去ののち、世をはかなんで武門をしりぞき髪をおとして、世捨て人となったと伝えられています。

この句の内容も、世をすてた者のわびしい住まいに、破れ障子から遠慮会釈なく、つめたい風もさむざむとした月光もはいりこんでくるといふ隠者の境涯をしめしています。それだけなら、なにも俳諧でもなんでもないのですが、この句には、ちよつと気のつかない、いたずらがあります。なるほど、紙が破れてないから、かみなし月かというところす。つまり、十月の昔の名であるへかみなづきに、〈紙無し〉がかけてあるのです。こういう言語遊戯が俳諧なのです。

